

オムロン「知財AIエージェント／研究開発AI基盤」 AWS Summit Japan 2026 講演 調査報告

エグゼクティブサマリー

2026年6月26日にAWS Summit Japan 2026で行われたオムロンの対象講演は、「特許調査工数50%減も！オムロンR&Dが内製する『知財AIエージェント』の裏側－検索精度UP&リードタイム短縮のノウハウ－」である。登壇者はオムロン株式会社 ストラテジックR&D本部 デジタルソリューションセンタ デジタルプラットフォーム部 部長・津田 学氏。オムロン公式の事前告知から、2026年6月26日（金）13:40～14:10、幕張メッセ Hall 4: Room 12での開催を確認できる。AWS公式サイトはAWS Summit Japan 2026全体を6月25～26日の幕張メッセ開催としている。セッションコードは複数の二次資料でAIM234と確認できるが、本調査時点ではAWS公式のセッション固有ページを静的URLとして再取得できなかったため、コードのみ一次情報による直接確認はできていない。 ¹

講演の中核は、単なる「生成AIで特許を要約する」事例ではない。オムロンは、①特許庁公開データを自社AWS環境へ取り込み、②Amazon OpenSearch ServiceとAmazon Bedrockを軸に特許検索・分析を行い、③技術資料から発明点を抽出して類似特許調査、特許性検討、発明届作成まで支援する知財業務特化AIエージェントと、④それを安全・低コストに社内展開する研究開発クラウド／生成AI基盤RDinXを、一体の研究開発DXとして提示した。講演スライドではAmazon S3、OpenSearch、Amazon EC2、Bedrock、Python/JavaScript製Webアプリ、外部商用特許DBとのAPI接続が描かれている。 ²

特許調査工数 50 %減も！ オムロン R&D が内製する『知財 AI エージェント』の裏側 －検索精度 UP &リードタイム短縮のノウハウ－

AWS Summit Japan 2026

オムロン株式会社 ストラテジックR&D本部
デジタルソリューションセンタ デジタルプラットフォーム部 部長
津田 学

OMRON

(C) 2026 OMRON Corporation

技術的に特に重要なのは、2025年のAWS公式builders.flashに、講演スライドより深い実装情報が既に公開されている点である。同資料では、特許庁XMLをS3に保存し、S3イベントでAWS Lambdaを起動して構造化、メタデータをAmazon DynamoDBで管理し、Amazon Titan Text Embeddings V2でベクトル化してAmazon OpenSearch Serverlessへ格納、生成処理に当時のClaude 3.5 Sonnetを利用したことまで明記されている。ただしこれは2025年時点の実装であり、2026年6月26日の現行系が全く同一であるとは確認できない。むしろ2026年スライドはOpenSearchを一般名「Amazon OpenSearch Service」とし、データ量に応じてサーバーレス型とインスタンス型を選ぶ考え方を示しているため、アーキテクチャが進化している可能性が高い。 ³

2026年講演の実画面では、モデル選択UIに**gpt-5.4、Claude Sonnet 4/4.5系、Claude Opus 4/4.1系**が表示されている。一方、どの機能・KPI測定でどのモデルを使用したか、各モデルが全てBedrock経由なのか、モデルルーティングの方式、フォールバックポリシーは開示されていない。したがって「GPT-5.4を使って50%削減した」と断定することはできない。 [4](#)

成果について、講演スライドは「**特許調査・発明届作成の工数を50%以上短縮**」とし、脚注では**2026年5月にオムロンR&Dエンジニアへ実施した調査**に基づくことを示す。オムロンの事後公式記事では、回答者の実感値として平均では**約65～70%削減**、慎重に見積もっても**約50%短縮**を確認したとしている。ただし、サンプル数、従来作業の基準時間、案件難易度、検索再現率・適合率、誤回答率、出願品質への影響、統計的有意性は公表されていない。このため「生産性改善の有力な社内実証」ではあるが、外部ベンチマークで検証済みの50%改善と解釈するべきではない。 [5](#)

また、2026年講演で「独自の生成AI基盤」と呼ばれる**RDinX**と、2025年のオムロン／AWS一次資料で「RDinX上の生成AI活用環境」として区別されていた**RD Buddy**との関係には名称上の変化がある。2026年資料にはRD Buddyという名称が登場せず、「AWS上に独自の生成AI基盤RDinXを構築」と説明する。**RD BuddyがRDinXに統合・改称されたのか、RDinXを包括ブランドとして簡略表現しただけなのかは未確認**である。 [6](#)

総合的には、オムロン事例の差別化要因はモデルそのものより、「**知財という機密度の高い専門業務**」「**自社管理の特許検索基盤**」「**複数モデル**」「**企業セキュリティ規程をAWSコントロールへ機械的に落とし込む基盤**」「**稼働時間・データ量に応じたコスト制御**」「**将来のエージェント共通認証・AIゲートウェイ**」までを一つの運用モデルにしたことにある。PoCの精度競争から、AIエージェントを安全・安価・反復可能に「量産し社内展開する仕組み」へ論点を移した講演と評価できる。 [7](#)

講演の基本情報と一次資料

講演情報

項目	確認結果	根拠・確度
イベント	AWS Summit Japan 2026	AWS公式。2026年6月25～26日、幕張メッセ開催。 8
講演タイトル	特許調査工数50%減も！オムロンR&Dが内製する『知財AIエージェント』の裏側－検索精度UP&リードタイム短縮のノウハウ	オムロン公式講演PDFおよび公式事後記事で一致。 一次情報・高確度。 9
日時	2026年6月26日（金） 13:40～14:10	オムロン公式技術Xアカウントの事前告知。AWSセッション個別ページでは再確認できず。 一次情報だがAWSプログラム直読は未確認。 10
会場	幕張メッセ Hall 4: Room 12	幕張メッセはAWS公式、Room 12はオムロン公式X。 11
登壇者	津田 学（TSUDA Manabu）氏	講演PDF。 12
当日の肩書・所属	オムロン株式会社 ストラテジックR&D本部 デジタルソリューションセンタ デジタルプラットフォーム部 部長	講演PDF表紙・最終ページおよびオムロン事後記事。 9

項目	確認結果	根拠・確度
セッション種別	事例セッション	オムロン公式記事・告知。 ¹³
セッションコード	AIM234	AWS資料一覧を整理したDevelopersIO等で確認。 AWS一次ページを直接再取得できていないため「二次確認」。 ¹⁴

なお、津田氏の所属は2025年のAWS builders.flashでは「技術・知財本部 デジタルソリューションセンタ デジタルプラットフォーム部 部長」となっているが、2026年6月の講演資料は「ストラテジックR&D本部」となっている。本報告では講演当日資料の2026年組織名を正とした。³

一次資料・映像・SNSのURL

資料	種別	URL
AWS Summit Japan 2026	AWS 公式	https://aws.amazon.com/jp/events/summits/japan/
AWS Summit Japan FAQ	AWS 公式	https://aws.amazon.com/jp/events/summits/japan/faqs/
オムロン講演レポート	オムロン 公式	https://www.omron.com/jp/ja/edge-link/news/763.html
講演スライド全34ページ	オムロン 公式 PDF	https://assets.ctfassets.net/gtaiz9xxk5s3/5SiVZvRMhBYgmEdSSQNJEV/ba89a73823f6d723a9b27d4dd
アーキテクチャ図	スライド 画像	https://assets.ctfassets.net/gtaiz9xxk5s3/5SiVZvRMhBYgmEdSSQNJEV/ba89a73823f6d723a9b27d4dd

資料	種別	URL
モデル選択画面	スライド画像	https://assets.ctfassets.net/gtaiz9xxk5s3/5SiVZvRMhBYgmEdSSQNJEV/ba89a73823f6d723a9b27d4ddc
発明届支援画面	スライド画像	https://assets.ctfassets.net/gtaiz9xxk5s3/5SiVZvRMhBYgmEdSSQNJEV/ba89a73823f6d723a9b27d4ddc
KPIスライド	スライド画像	https://assets.ctfassets.net/gtaiz9xxk5s3/5SiVZvRMhBYgmEdSSQNJEV/ba89a73823f6d723a9b27d4ddc
セキュリティ設計	スライド画像	https://assets.ctfassets.net/gtaiz9xxk5s3/5SiVZvRMhBYgmEdSSQNJEV/ba89a73823f6d723a9b27d4ddc
将来のAIゲートウェイ	スライド画像	https://assets.ctfassets.net/gtaiz9xxk5s3/5SiVZvRMhBYgmEdSSQNJEV/ba89a73823f6d723a9b27d4ddc
コスト最適化	スライド画像	https://assets.ctfassets.net/gtaiz9xxk5s3/5SiVZvRMhBYgmEdSSQNJEV/ba89a73823f6d723a9b27d4ddc
Tech OMRON 事前告知	オムロン公式SNS	https://x.com/Tech_OMRON/status/2067458690349969717
津田氏 LinkedIn プロフィール	登壇者本人	https://www.linkedin.com/in/ManabuTsuda/

資料	種別	URL
津田氏・日経xTECH記事紹介投稿	登壇者本人	https://jp.linkedin.com/posts/manabutsuda_%E3%82%AA%E3%83%A0%E3%83%AD%E3%83%B3%E3%81%8Cbedrock%E6%B4%activity-7476469679998361601-nQgM
OMRON Digital投稿	グループ会社公式SNS	https://x.com/omron_digital/status/2071867770560774422

動画については未確認事項がある。 オムロンの公式事後記事は「AWS Summitサイトからオンデマンド視聴」できる旨を案内し、DevelopersIOもAWS公式サイトで資料・オンデマンド公開が行われたことを報じている。しかし、2026年9月2日の本調査では**AIM234だけを直接開ける恒久的な公開動画URLを確認できなかった**。イベント登録・ログインを伴う動的ページであった可能性があるため、上表では存在を断定できる動画固有URLを掲載していない。 ²⁶

講演内容と技術アーキテクチャ

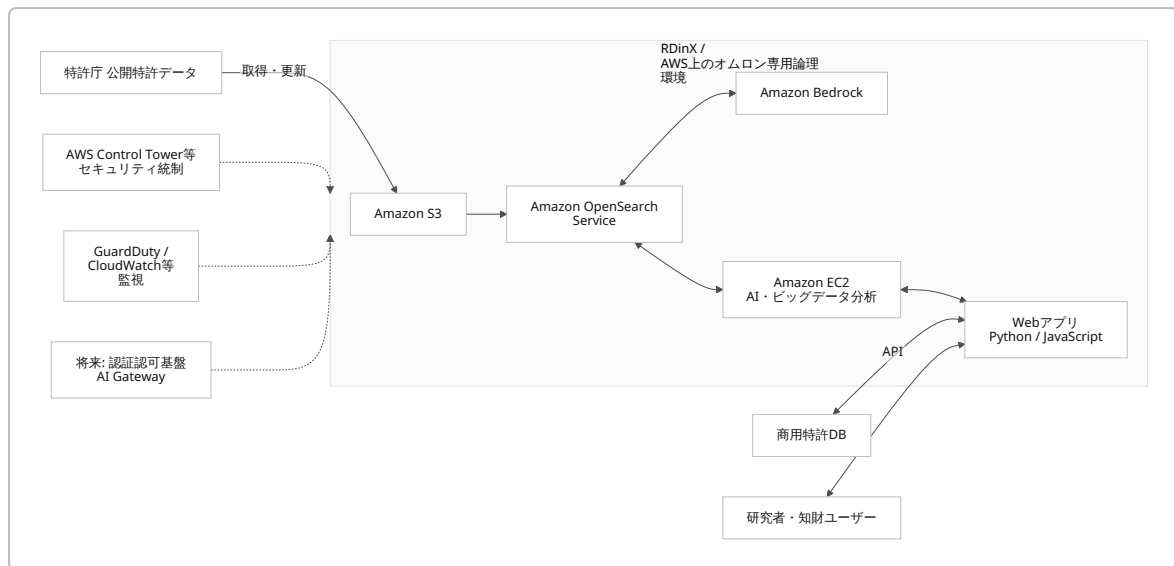
問題設定と講演の狙い

オムロンが出発点としたのは、研究者自身が発明を生み出しながら、先行特許調査や発明届作成まで相当部分を担当しなければならないという負荷である。特許検索では数百～数千件規模の文献を読み、技術的な近さや他社動向を評価する必要がある。講演では、こうした非創造的時間をAIエージェントへ移し、研究者を本来の研究・発明活動へ戻すことが目的として置かれた。 ²

スライド冒頭は、「AIネイティブ時代にはAIエージェントが研究開発プロセスを劇的に変え、工数を減らす」「一方、AIエージェントの活用拡大にはセキュアなクラウド基盤が必要」という二つを講演の主張としている。つまり、**アプリケーション側のAIエージェントと、企業展開側のプラットフォームを対として説明する構成**だった。 ¹²

2026年講演から再構成した論理アーキテクチャ

以下は講演PDFのAWS構成図を、サービス間関係が分かるよう論理的に再構成したものである。スライドは全体を「Amazon VPC: RDinX」として図示しているが、S3やBedrockのようなAWSマネージドサービスが文字通り顧客VPC内に配置されるという意味とは限らない。**VPC Endpoint、PrivateLink、サブネット、ルーティングの詳細は非開示**である。 ¹⁶



2026年スライドで**直接確認できる**AWS／技術要素は、Amazon S3、Amazon OpenSearch Service、Amazon EC2、Amazon Bedrock、AWS Cloud/VPC、Python/JavaScript製Webアプリ、商用データベースAPIである。オムロンは特許庁の公開特許データを「丸ごと自社環境に持つ」方式を採りつつ、現在は商用外部DBのAPIも併用し、検索範囲とコストのバランスを取っていると説明している。 9

データパイプラインと検索方式

2026年の講演だけではETL処理のAWSサービス名までは示されないが、2025年11月のAWS builders.flash記事は同じ知財AIエージェントについてかなり具体的なパイプラインを開示している。そこでは、**特許庁公開情報 → Amazon S3 → S3イベント通知 → AWS LambdaでXML解析・構造化 → DynamoDBでメタデータ管理**という処理が記載されている。 27

検索は2025年時点では**Amazon OpenSearch Serverlessによるベクトル検索**で、Amazon Bedrockの**Amazon Titan Text Embeddings V2**を用いて特許文書を埋め込み化していた。さらに、特許全文を一括で単純ベクトル化するのではなく、**技術分野・課題・解決手段などの意味単位ごとにベクトル化**することで検索精度を高める方式が説明されている。 27

これは、検索クエリと特許文献を表面的なキーワード一致だけで照合するのではなく、意味的類似性を使って候補文献を拾い、生成モデルで説明・分析する**RAGに近い検索拡張型構成**と見ることができる。ただし、2026年版でBM25とベクトル検索を組み合わせた「ハイブリッド検索」を行っているか、リランキングモデルがあるか、検索スコアをどう統合しているかは**未確認**である。 3

また、2025年記事では入力が長すぎる場合、単純に末尾を切り落とすのではなく、重要キーワードを残す「インテリジェントな要約／切り詰め」を行い、切り詰め部分から重要語彙を抽出して再投入する精度改善策も説明されている。モデルの組み合わせやクエリパターン自体は「機微情報」として非公開である。 27

使用モデル

時点を分けて見る必要がある。

時点	一次資料で確認できるモデル	解釈
2025年11月	Amazon Titan Text Embeddings V2、Claude 3.5 Sonnet	AWS builders.flashが実装を明記。埋め込みと生成にそれぞれ使用。 27

時点	一次資料で確認できるモデル	解釈
2026年6月講演	UI上に gpt-5.4、Claude Sonnet 4/4.5系、Claude Opus 4/4.1系 等	実画面のモデル選択メニューで確認。ただしどのモデルが各業務の本番既定値かは未開示。 17
KPI測定時	未確認	「50%以上短縮」の評価でどのモデル・モデル組み合わせを使ったかは非開示。

したがって、2026年のシステムは**モデル固定型からモデル選択／マルチモデル型へ発展した可能性が高い**。ただしこれはUIからの推論であり、モデルルーティング、価格・品質に応じた自動選択、障害時フォールバック、全モデルのBedrock経由可否については講演資料に実装説明がない。 28

セキュリティ

RDinXの設計思想は、「オンプレミスで守っていた研究開発データをクラウドへ移しても、同等レベルの企業セキュリティを維持する」というものだった。オムロンは自社の情報セキュリティ規程を分解し、AWSの設定項目・ガードレールへ対応付け、該当するAWS標準設定がないものについては自前実装する方式を採用している。中心となる管理サービスとして**AWS Control Tower**を明示している。 29

2026年のセキュリティ設定例には、CloudTrail、AWS Config、Control Towerのガードレール、ルートユーザーMFA、パブリックIP制限、暗号化、S3パブリックアクセス遮断、不要ポート・SSH制限、リージョン制限などが含まれる。また、**Amazon GuardDuty**の各種検知と、**Amazon CloudWatch Alarm**によるEC2、NAT Gateway、Transit Gateway、Route 53 Resolver、NLB等の稼働監視例もスライドに列挙されている。ここで注意すべきは、これらは**RDinX全体の統制・監視設定例**であり、全項目が知財AIエージェント専用構成だとまでは言えないことである。 12

2025年の実装資料ではさらに、IAM最小権限、OpenSearch Serverlessのデータアクセスポリシー、S3のSSE-S3、OpenSearchのAWS管理キー暗号化、DynamoDBの保存時暗号化とPITR、TLS 1.2以上、社内LANとの**AWS Direct Connectによる閉域接続**、CloudTrailによるAPI監査、CloudWatch Logs、S3+Athenaによるユーザー／組織別の生成AI利用コスト分析、AWS X-Rayによる分散トレーシングまで説明されている。 27

一方、現在のIdP/SSO製品、IAM Identity CenterやCognito等の採否、KMSの顧客管理キー利用、**Bedrock Guardrails**の採否、**DLP、機密分類、外部商用DB APIへ渡す情報範囲**は、2026年講演資料からは確認できない。

AI基盤、運用、LLMOps

2026年資料では、作成したAIエージェントをRDinXへ登録して利用者認証を可能にし、他のエージェントとの相互利用・相互通信をRDinX上で監視する構想を示す。次の段階として、**認証認可基盤とAIゲートウェイ**を構築し、エージェント間のプロンプトを監視する方向を明示している。 21

これは「各部門が個別にLLM APIキーを持つ」方式から、「モデル呼び出し・認証・監査を共通ゲートウェイに集約する」方向を示唆する。ただし、API Gateway等の具体的サービス、エージェント登録仕様、モデルカタログ、レート制御、トークン予算、バージョニング、モデル評価ゲート、プロンプトレジストリ、A/Bテスト、CI/CD、Infrastructure as Code、ロールバック手順などは**未確認**である。したがって、一般的な意味での「成熟したLLMOpsプラットフォーム」が既に完成しているとまでは評価できない。 12

さらに、対象システムはオムロン自身が「AIエージェント」と呼んでいるものの、メイン講演資料には**自律計画ループ、ツール選択ポリシー、長期メモリ、マルチエージェント・オーケストレーター、Amazon Bedrock AgentCore**などの実装は示されない。確認できるのは、検索、分析、対話、レポート作成、技術資

料解析、発明届生成を一連のワークフローとして支援する機能である。この意味で、「エージェント」という呼称は妥当でも、自律型エージェントの程度は未確認とするのが厳密である。 12

スケーラビリティとコスト最適化

オムロンが強調したのは静的なスペック削減ではなく動的制御である。講演では、データ容量が少ない領域ではサーバーレス型がコスト面で有利になる一方、規模が大きくなるとインスタンス型の方が有利になり得るため、データ量に合わせて方式を選ぶという考え方を示した。ただし、この図でどのAWSサービスのサーバーレス／インスタンスを切り替えているか、切替閾値が何GBかは明示されていない。 22

もう一つは、社員が使わない平日夜間や休日にサーバーを止めるON/OFF制御である。スライドでは一週間の「非稼働時間＝約55%」と図示する。これは重要な点だが、「AWS費用を55%削減した」という実測KPIではない。あくまで停止可能時間の概算であり、実際の費用削減率、月額AWS費用、Bedrockのトークン費、OpenSearch費、商用DB利用料を含むTCOは公開されていない。 22

オムロンのより一般的なRDinX運用では、利用者別の仮想PC稼働時間・利用料を可視化し、予算消化率が一定値を超えた場合のメールアラートも実装している。トライアル分析の結果、Reserved InstancesやSavings Plansだけに頼るより、研究現場では未使用時に確実に電源を切ることが大きな効果を持つとの知見を得たとしている。 30

デモ・ユースケース・成果指標

講演で示された実画面

講演資料は単なる概念図ではなく、実際の知財AIエージェント画面を多数掲載している。主要デモを整理すると次の通りである。 12

ユースケース	実演・画面内容	技術的意味
特許自然言語検索	「AI」で検索すると約1,000件の公開特許がヒットし、AIが各特許の概要を説明。検索結果について「LLMとは？」のように追加質問できる。JPだけでなくUS、EP、CN、WO等の国・地域選択も画面で確認できる。 31	検索結果一覧と生成AI対話を分断せず、検索→理解まで一画面化。
特許ポートフォリオ分析	出願人×年のヒートマップ、競合の技術的類似性、競争力ベンチマーク等を可視化。 32	単件検索からIPランドスケープ／競合分析へ拡張。
発明点抽出	設計資料・仕様書等をドラッグ＆ドロップで入力し、AIが発明ポイントを整理。スライドUIではTXT、PDF、DOCX等のアップロードが確認できる。 18	「既に特許番号を知っている人」だけでなく、研究開発中の技術資料を起点に知財業務を開始。
先行技術調査	抽出した発明点から自然言語の検索クエリを作り、類似度の高い先行特許を提示。 12	発明者が専門的な特許検索式を一から組む負担を削減。
特許性検討	類似特許との比較を支援し、特許化可能性の検討材料を提示。 15	検索から判断支援へ範囲を拡張。ただし法的判断をAIへ完全委任したとの説明ではない。

ユース ケース	実演・画面内容	技術的意味
発明届作 成	技術資料・発明点・先行特許調査をつなぎ、社内の発明届作 成まで支援。 2	「検索ツール」ではなく発 明管理ワークフローへ踏み 込んでいる。
商用DB 連携	外部商用特許DBをAPIで利用。 2	自社保有JPOデータだけに 閉じず、必要時に商用デー タソースを補完。

発明届支援が特に重要である。従来の「特許検索AI」は既存文献を探すことが中心だが、オムロンの設計は**R&D成果物→発明点抽出→先行特許→特許性検討→発明届**を連続化している。これにより、検索作業単体だけでなく、研究者が知財部へ発明を引き渡すまでのリードタイム短縮を狙っている。 2

KPIとパイロット結果

最も明確なKPIは工数である。講演資料は、**特許調査と発明届作成に要する時間を50%以上短縮**したと提示し、その根拠を2026年5月のオムロンR&Dエンジニア調査としている。 19

事後のオムロン公式記事ではさらに、社内エンジニアのアンケートで特許調査と発明届作成にかかる時間は**平均で約65～70%減少**し、ばらつきを考慮して保守的に見積もっても**約50%の短縮**を確認した、と説明している。したがって「50%」は平均値ではなく、対外説明上の慎重な表現と理解するのが適切である。 33

ただし、このKPIには以下の検証上の制約がある。

指標	公開状況
工数削減	確認済み：50%以上。平均実感値65～70%程度。 5
調査時期	確認済み：2026年5月。 19
サンプル数	未確認
従来の平均所要時間	未確認
AI導入後の絶対所要時間	未確認
検索Precision / Recall / F1 / NDCG	未確認
タイトルにある「検索精度UP」の定量値	未確認
誤要約・幻覚率	未確認
特許専門家によるブラインド品質評価	未確認
出願件数・登録率への効果	未確認
発明発掘件数の増加	未確認
MAU/利用者数/利用部門数	未確認
ROI・人件費換算効果	未確認
AWSコスト削減の実測額・率	未確認

したがって、**工数KPIは強いが、検索品質KPIは弱い**というのが公開情報からの評価である。講演タイトルには「検索精度UP」が入るものの、精度改善を何%とする公開数字は確認できない。知財調査では一件の重要な先行技術を取り逃がすことが大きな意味を持ち得るため、今後外部評価で最も見たい数字は、単なる時間短縮よりも**Recall、専門家との一致率、重要文献取り逃し率**である。これは本報告の分析であり、オムロン自身がその評価指標を公表したという意味ではない。 ³⁴

展示ブース

オムロンはセッションだけでなくAWS for Industries Zoneにも出展し、知財AIエージェントとその基盤を紹介した。オムロン公式記事によれば、**2日間で約470人**がブースを訪れ、AIエージェントそのものだけでなく「どう安全に運用するか」「どう基盤化するか」への質問が多かったという。これは製品利用KPIではないが、エンタープライズ層の関心がアプリから運用基盤へ移っていることを示すイベント上の指標として参考になる。 ³⁵

関連発表・メディア報道・競合比較

オムロン／AWSの関連公式発表

資料	要約	URL
AWS builders.flash 「知財業務を革新するオムロンの知財AIエージェント実装事例」	2025年11月公開、津田氏・熊巳創氏・オムロンデジタルの日下武紀氏が執筆。 S3→Lambda→DynamoDB、Titan Text Embeddings V2、OpenSearch Serverless、Claude 3.5 Sonnet、IAM、暗号化、Direct Connect、CloudTrail、Athena、X-Rayなど、今回の講演より深い実装を開示。2026年講演を技術的に理解する上で最重要の補完資料。 ²⁷	https://aws.amazon.com/jp/builders-flash/202511/omron-intellectual-property-ai-agent/
OMRON TECHNICS 「研究開発プロセスのデジタルトランスフォーメーション」	RDinXと生成AI環境RD Buddyを体系的に説明。Control Towerによる複数アカウント統制、仮想PCを約5分で払い出す仕組み、ON/OFF制御、4層の生成AIセキュリティ、モデル使い分け等を詳述。 ³⁶	https://www.omron.com/jp/ja/technology/omrontechnics/introduction/introduction_169-3.html
「生成AIを活用した知財活動の新展開」	オムロン技術・知財本部の熊巳創氏・大谷正樹氏による2025年の解説記事。キーワードにAIZAQ、IP Landscape、AI Agentを含む。J-STAGE掲載だが分類は「解説誌・一般情報誌」で、査読原著論文として扱うべき資料ではない。 ³⁷	https://www.jstage.jst.go.jp/article/isciesci/69/9/69_327/_article/-char/ja/
AIZAQ公式紹介	オムロンが2023年に全社横断の生成AI活用推進活動AIZAQを開始。IT・法務等とガイドラインやFAQを作成し、AIガバナンス委員会も設置したことを説明。知財AIエージェントが単独プロジェクトではなく、全社AIガバナンスの文脈にあることを示す。 ³⁸	https://www.omron.com/jp/ja/edge-link/news/717.html

資料	要約	URL
AWS Summit Japan 2026「AI for Science」講演レポート	OMRON SINIC Xの牛久祥孝氏による別セッション。Amazon Bedrock AgentCoreを用いた研究AIエージェント、単一／マルチエージェント比較、人間介入等を検証。今回の知財AIとは別系統なので混同注意。 39	https://www.omron.com/jp/ja/edge-link/news/761.html

ここからオムロン内部のAI戦略を三層で見ることができる。**AIZAQ=全社的な生成AI活用・ガバナンス、RDinX/RD Buddy=研究開発向け技術基盤、知財AIエージェント=具体的な業務アプリケーション**、という構造である。ただし前述の通り、2026年講演ではRD Buddyの名称が使われずRDinXを「独自の生成AI基盤」と表現しており、ブランド・アーキテクチャ境界が変わったのかは未確認である。 40

報道・技術メディア

媒体	報道内容・評価	URL
日経クロステック	「オムロンがBedrock活用で知財AIエージェント内製、特許関連工数を50%減」として講演当日に記事化。日経BP公式SNSにも掲載され、津田氏自身もLinkedInで記事化への謝意を投稿しているため、記事の真正性は高い。ただし本調査環境ではxtech.nikkei.comがrobots制限となり、 本文全文は独立検証できなかった 。したがって本報告ではタイトル・公開スニペットを超える独自情報には依存していない。 41	https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/03664/062600003/
DevelopersIO / Classmethod	AWS Summit Japan 2026で公開された各セッション資料・オンデマンドを一覧化し、対象講演を AIM234 として掲載。講演内容そのものの詳細レポートというより、AWS公式資料への索引として有用。 42	https://dev.classmethod.jp/articles/aws-summit-japan-2026-session-materials-and-ondemand/

調査した公開範囲では、**対象講演だけを独立して詳細報道した主要日本語技術メディアとして明確に確認できたのは日経クロステックが中心**だった。イベント全体のAIエージェント記事は複数存在するが、オムロンAIM234の技術内容を独自取材で掘り下げる記事は限定的である。したがって、現時点で最も情報量が多いのは報道記事よりも**オムロン自身の34ページ講演PDF、事後記事、2025年AWS builders.flash**である。 43

同分野の他社との比較

「競合」は二つに分ける必要がある。一つは**知財AIそのものの競合**、もう一つは**企業内AIエージェント／R&D基盤の競合**である。

企業・事例	公開されている取り組み	オムロンとの差
島津製作所／ Genzo AI	島津製作所の知財部が内製してきた知財業務自動化プラットフォームを子会社 Genzo AI として外販。発明・明細書作成、特許翻訳、特許庁審査対応、侵害予防、契約書レビュー等まで対象とし、2026年4月からSaaS提供。2030年度売上15億円を目標。 ⁴⁴	島津は業務範囲と事業化で先行。 オムロンは現時点の公開情報ではR&D社内活用と基盤設計が中心で、検索～発明届に強い。一方、セキュアなR&Dクラウド基盤やAWS統制の開示はオムロンの方が具体的。
パナソニック／ PatentSQUARE	パナソニックの特許調査ノウハウをクラウドサービス化。技術者・知財担当者向けAI機能、グローバル検索・分析を提供し、ID型からコーポレート型まで商用価格体系を持つ。ISO 27001/27017要件に準拠した運用を説明。 ⁴⁵	PatentSQUAREは成熟した特許検索SaaS。 オムロンは自社研究データと発明届ワークフローを深く統合し、自社AWS環境にデータとエージェントを持つ「社内DX基盤」色が強い。
リコー／Hi.DEEN	同じAWS Summit Japan 2026で、エージェンティックRAG環境「Hi.DEEN」を用いた企業AX、マルチモーダルRAG、Graph RAGによる図表・図面を含む現場文書のナレッジ化、さらにPhysical AIとの連携を紹介。 ⁴⁶	リコーは 広いR&D・現場ナレッジ＋Physical AI が射程。オムロンAIM234は知財という狭い領域に深く入り、工数50%以上という具体KPIとセキュリティ／コスト運用を詳しく提示している。
三菱電機	社内AI施策「Serendie Bootcamp」で1年間に累計約400件の申請があり、マルチAIエージェント、製造ライン支援、 生成AI×特許業務支援等 が生まれたと公表。 ⁴⁷	三菱電機はAI案件の 社内量産制度 という点で近い。オムロンは知財AIの個別アーキテクチャ・AWS統制・KPIをより詳細に公開している。

この比較から、オムロンの独自性は「最先端の基盤モデルを自社で開発したこと」ではない。むしろ、**既存の高性能FMを交換可能に使いながら、会社固有の特許データ、研究資料、情報セキュリティ規程、コスト運用、発明業務フローを統合したこと**にある。島津のような外販事業化やパナソニックの成熟した特許検索SaaSとは異なり、オムロンは今のところ**R&Dの生産性を高める内部プラットフォーム戦略**としての色が強い。 ⁴⁸

意義・今後の展望・リスク

講演の意義

第一の意義は、企業AI導入の論点を「LLMの精度」から「**AIエージェントを安全に多産できる仕組み**」へ移していることである。講演最終部では、AIネイティブ化によって各業務プロセスの工数を減らすエージェントが次々に生まれることを前提に、**強固なクラウドセキュリティ基盤への投資が必要だ**と結論づけている。 ¹²

第二に、知財というユースケースの選択が戦略的である。特許業務は公開文献という大量の外部データと、未公開発明・設計資料という極めて機密度の高い内部データを同時に扱う。そのため「公開Chatbotに資料を入れるだけ」では展開しにくく、認証、監査、ネットワーク分離、データ管理を最初から設計する必要がある。オムロンはまさにこの制約をRDinXの存在理由として説明している。 ⁴⁹

第三に、「**全特許データを自社側に保持する**」＋「**必要な部分は商用DB APIを使う**」というハイブリッドなデータ戦略が興味深い。完全な外部SaaS依存に比べて、独自の前処理・ベクトル化・検索アルゴリズムを適

用できる一方、全データ保有に伴う更新・ストレージ・インデックス運用コストも負う。オムロンは後者を動的コスト制御で吸収しようとしている。 43

第四に、モデル選択をUIに露出させ、特定モデルに固定しない設計は、モデル性能・価格の変化が激しい2026年のエンタープライズAIでは合理的である。ただし、本当の意味でのモデル可搬性を実現するには、プロンプト差異、コンテキスト長、ツール呼び出し仕様、構造化出力、モデルごとの安全性・評価値を吸収するゲートウェイが必要になる。オムロンが「AIゲートウェイ」を今後のテーマにしていることは、その次の課題を認識していることを示す。 50

今後の展望

2025年のAWS記事では、特許以外の技術論文、経営情報、社内DBとの連携や、機械学習の予測モデルを組み合わせた予測分析を将来方向として挙げている。これが進めば、単なる「似た特許を探すAI」から、研究テーマ選定、競合技術動向、ホワイトスペース探索、出願戦略までを横断するR&Dインテリジェンス基盤へ発展する余地がある。 27

2026年講演がさらに示した方向は**複数AIエージェントの共通基盤化**である。知財AIだけでなく、他の研究開発エージェントやAIシステムをRDinXポータルへ集約し、認証・相互利用・相互通信の監視を一元化しようとしている。これは、個別AIアプリの開発から「社内AIエージェント・プラットフォーム」への転換を意味する。 21

オムロン社内では別途、OMRON SINIC XがAWSとAI for Scienceを進め、Amazon Bedrock AgentCore上で研究手順をエージェントへ変換し、単一／マルチエージェント、人間介入を比較している。知財AIとこの研究自動化系が将来的に同じ認証・AIゲートウェイ・観測基盤へ収束するかは**未確認**だが、技術的には十分あり得る方向である。 51

主要リスク

リスク	現状評価
特許検索の取り逃し	最大の技術・業務リスク。工数KPIはあるがRecall等が非公開で、「高速になった」ことと「重要先行技術を漏らさない」ことは別問題。
生成AIの誤要約・誤判断	特許性の説明や競合比較が説得的でも正しいとは限らない。最終判断を知財専門家がどこまでレビューするか、正式なHuman-in-the-loop基準は公開されていない。
未公開発明の漏洩	オムロン自身が最重要課題として認識し、IAM、暗号化、閉域接続、Control Tower等を整備している。外部商用DB APIへの情報を送信するかは未確認。 3
プロンプトインジェクション／悪性文書	2025年のRD Buddy資料ではコンテンツフィルタによるプロンプトインジェクション対策を説明している。ただし2026年知財AIの現行実装で使用する具体的フィルタ製品・ポリシーは未確認。 52
モデル更新による品質変動	2026年UIは複数モデルを選択できる一方、モデルごとの回帰評価・承認プロセスは非公開。モデル交換時に検索結果や発明点抽出が変わる可能性を管理するLLMOpsが重要になる。 17
データ鮮度	特許庁データの「取得・更新」は説明されるが、更新頻度、欠損検知、再インデックスSLAは未確認。

リスク	現状評価
中央集約による Blast Radius拡大	RDinXへ多数エージェントを登録し相互通信させるほど、一つの認証・権限ミスが及ぼす範囲は広がる。将来の認証認可基盤・AIゲートウェイが重要。 53
コスト／UXトレードオフ	夜間停止やサーバーレス化はコストを下げる一方、起動待ち・コールドスタート等との兼ね合いがある。実際のP95/P99応答時間やSLAは非公開。
名称・責任境界の曖昧さ	2025年はRDinXとRD Buddyを分離して説明、2026年はRDinX自体を生成AI基盤と表現。運用上の責任分界が本当に変わったのか単なる説明上の簡略化なのか、外部からは判断できない。 54

特に重要なのは、「50%工数削減」という成功を、そのまま「50%高品質化」と読み替えないことである。企業知財の本質的価値は、検索時間だけでなく、重要発明の取りこぼし防止、強い権利の形成、FTOリスクの低減、競合技術の早期把握にある。オムロンの公開情報は前者の生産性では明確な成果を示す一方、後者の知財品質・事業成果についてはまだ十分な公開KPIがない。この点が次の評価フェーズになる。

出典信頼度と未確認事項

出典別の信頼度

出典	信頼度	理由
2026年オムロン公式講演PDF	A+ / 最重要	当日講演資料そのもの。タイトル、登壇者、AWS構成、画面、KPI、セキュリティ、コスト、将来構想を直接確認できる。 12
オムロン公式事後講演レポート	A	講演内容を当事者が詳細に再構成し、PDFにはない平均65～70%等も説明。ただし自社広報であるため成果評価は自己申告。 55
AWS Summit Japan公式サイト	A	イベント日程・会場・公式テーマの一次情報。対象セッションの静的詳細ページは本調査では再取得できず。 8
Tech OMRON公式X	A-	当日の時間・Roomを直接告知したオムロン一次情報。正式プログラムPDFほどではないが信頼度は高い。 23
AWS builders.flash 2025年記事	A	AWS公式媒体上でオムロン担当者自身が実装を執筆。技術詳細の信頼性は非常に高い。ただし2025年時点であり、2026年現行構成への適用には時点差がある。 27
OMRON TECHNICS	A	オムロン公式技術論文／技術解説。RDinX/RD Buddyの設計思想を体系的に確認可能。時点差に注意。 56
J-STAGE「生成AIを活用した知財活動の新展開」	A-	オムロン知財担当者による学協会誌掲載資料。ただし種別は「解説」であり査読原著研究ではない。 37
津田氏LinkedIn	A-	登壇者本人の投稿で日経記事の存在を確認できる。技術仕様を検証する資料としては補助的。 24
日経クロステック	B+	国内主要技術メディアによる独立報道。ただし本調査環境ではrobots制限により本文を直接取得できず、タイトル・公開スニペットと本人投稿の範囲で確認。 57
DevelopersIO	B	AWS分野で有力な技術メディア。セッションIDや資料一覧確認には有用だが、AWS一次プログラムそのものではない。 42

未確認事項

本調査で特に重要な未確認事項は次の通りである。

AWS公式セッション固有情報。 講演タイトル、登壇者、日時、Roomはオムロン一次資料で高確度に確認できたが、AWS公式プログラムのAIM234個別ページを本調査時点で直接再取得できていない。そのためAIM234というセッションコードは二次資料確認である。 42

RDinXとRD Buddyの2026年時点の正式な関係。 2025年資料では「RDinX＝研究開発クラウド」「RD Buddy＝RDinX上の生成AI環境」と明確に分かれるが、2026年講演ではRD Buddyが消え、RDinXを「独自の生成AI基盤」と呼ぶ。統合、改称、ブランド整理のいずれかは公開資料だけでは判定できない。 58

2026年本番系のデータパイプライン。 Lambda、DynamoDB、Titan Text Embeddings V2、OpenSearch Serverlessは2025年実装として確認できるが、2026年6月26日時点でも全く同じ構成かは未確認。特に2026年資料がServerless／Instance型の使い分けを説明しているため変更の可能性はある。 59

現在のモデル構成。 UIにはGPT-5.4とClaude 4系が見えるが、各業務の既定モデル、KPI測定モデル、自動ルーティング、Bedrock外への接続有無、モデル別コスト、プロンプトテンプレートは非公開。 17

検索アルゴリズム。 2025年のベクトル検索は確認済みだが、BM25とのハイブリッド検索、検索式生成方法、Embeddingの更新、chunking、reranking、重複除去、特許ファミリー処理、引用関係グラフ、IPC/CPC分類利用の詳細は未確認。 27

検索精度KPI。 講演タイトルに「検索精度UP」とあるが、Recall、Precision、専門家一致率等の数値は確認できない。工数50%以上削減とは別評価軸である。 12

KPI調査設計。 2026年5月社内調査であることは確認できるが、回答者数、職種構成、案件数、対照群、導入前後の絶対時間、統計処理方法は非公開。 19

ユーザー規模と本番展開範囲。 R&Dエンジニアによる利用・評価は確認できるが、全社本番利用人数、MAU、同時接続、処理特許件数、保存データ容量、QPS、P95レイテンシは未確認。

正式なLLMOps/MLOps。 CloudTrail、CloudWatch、Athena、X-Ray等のインフラ／コスト監視は確認できるが、モデル品質の継続評価、Golden Dataset、プロンプト・モデルバージョン管理、CI/CD、承認ワークフロー、ドリフト監視は未確認。 27

実コスト。 夜間・休日の非稼働時間約55%、サーバーレス／インスタンス使い分けは公開される一方、月額費用、1検索あたり単価、Bedrockトークン費、TCO、導入前比の費用削減率は非公開。 60

外部商用特許DBの事業者名と情報送信範囲。 API利用は確認できるが、サービス名、契約条件、どの検索情報・社内情報が外部へ渡るかは非公開。 15

オンデマンド動画の恒久公開URL。 公開されていたこと自体はオムロン公式およびAWS資料一覧の報道から確認できるが、2026年9月2日時点でAIM234動画へ直接到達できる安定した公開URLは確認できなかった。 26

以上を踏まえると、公開情報から確実に言えるのは、オムロンが単体の生成AI PoCを越え、「JPO特許データ＋意味検索＋複数LLM＋研究開発クラウド＋企業セキュリティ統制＋動的成本管理＋将来の共通AIゲートウェイ」というエンタープライズAI運用モデルを実装し、少なくとも社内調査では特許調査・発明届作成の工数50%以上削減を確認したという点である。一方で、検索精度、品質保証、利用規模、実コスト、2026

年時点の詳細なLLMOpsはまだ外部検証できる形では開示されていない。したがって、この講演は「特許AIの性能競争」の事例以上に、**製造業R&DでAIエージェントを本番展開するための“基盤工学と運用工学”を前面に出した事例**として見るのが最も妥当である。 61

1 4 5 6 7 9 12 16 17 18 19 20 21 22 28 29 31 32 34 50 53 60 61 特許調査工数50%減も！オムロンR&Dが内製する『知財AI エージェント』の裏側－検索精度UP & リードタイム短縮のノウハウ
<https://assets.ctfassets.net/gtaiz9xxk5s3/5SiVzVRMhBYgmEdSSQNJEV/ba89a73823f6d723a9b27d4ddd17e2cf/98a19f7b-8ce9-4ab1-8812-0cef79586758.pdf>

2 13 15 43 49 55 研究開発DXは“仕組み”で決まる！
https://www.omron.com/jp/ja/edge-link/news/763.html?utm_source=chatgpt.com

3 27 48 58 59 知財業務を革新するオムロンの知財 AI エージェント実装事例 - builders.flash☆ - 変化を求めるデベロッパーを応援するウェブマガジン | AWS
<https://aws.amazon.com/jp/builders-flash/202511/omron-intellectual-property-ai-agent/>

8 11 AWS Summit Japan 2026
https://aws.amazon.com/jp/events/summits/japan/?utm_source=chatgpt.com

10 23 Tech OMRON / オムロン テクノロジー ...
https://x.com/Tech_OMRON/status/2067458690349969717?utm_source=chatgpt.com

14 42 AWS Summit Japan 2026公式ページでセッション資料が公開 ...
https://dev.classmethod.jp/articles/aws-summit-japan-2026-session-materials-and-ondemand/?utm_source=chatgpt.com

24 オムロンがBedrock活用で知財AIエージェント内製、特許関連工数を50%減 | 津田 学
https://jp.linkedin.com/posts/manabutsuda_%E3%82%AA%E3%83%A0%E3%83%AD%E3%83%B3%E3%81%8Cbedrock%E6%B4%BB%E7%94%A8%E3%81%A7%E7%9F%A5%E8activity-7476469679998361601-nQgM

25 AWS Summit Japan 2026に参加。 ODCはオムロンの研究 ...
https://x.com/omron_digital/status/2071867770560774422?utm_source=chatgpt.com

26 33 35 研究開発DXは“仕組み”で決まる！ | We are Shaping the Future! 私たちが手繰り寄せる未来ストーリー | オムロン株式会社
<https://www.omron.com/jp/ja/edge-link/news/763.html>

30 36 52 54 56 研究開発プロセスのデジタルトランスフォーメーション クラウド・AIネイティブ時代の研究開発プラットフォーム | OMRON TECHNICS | テクノロジー | オムロン
https://www.omron.com/jp/ja/technology/omrontechnics/introduction/introduction_169-3.html

37 生成AIを活用した知財活動の新展開
https://www.jstage.jst.go.jp/article/isciesci/69/9/69_327/_article/-char/ja/

38 40 オムロンの生成AI活用推進プロジェクト「AIZAQ」ースマートな ...
https://www.omron.com/jp/ja/edge-link/news/717.html?utm_source=chatgpt.com

39 51 AIエージェント×ロボティクスで研究開発を加速する | We are Shaping the Future! 私たちが手繰り寄せる未来ストーリー | オムロン株式会社
<https://www.omron.com/jp/ja/edge-link/news/761.html>

41 57 Post
https://x.com/nikkeibpITpro/status/2079189619711852892?utm_source=chatgpt.com

44 知財業務自動化SaaS提供の子会社Genzo AIを設立 当社知的 ...
https://www.shimadzu.co.jp/news/2026/acmnk57uqb3579ay.html?utm_source=chatgpt.com

45 よくある質問 | 特許調査支援サービス「PatentSQUARE」

https://www.panasonic.com/jp/business/its/patentsquare/faq.html?utm_source=chatgpt.com

46 AWS Summit Japan 2026への講演・出展情報を掲載しました

https://promo.digital.ricoh.com/ai/topics/20260602/?utm_source=chatgpt.com

47 Serendie Bootcamp AIをもっと気軽に - 三菱電機 公式

https://note.mitsubishielectric.co.jp/n/n14cc3a54f45e?utm_source=chatgpt.com